

若者が地域に関心を持つ仕掛けづくりに関する研究

研究代表者：茶元 美樹

共同研究者：久米 成美、仲本 雅美、前原 綾

目 次

- 第1章 研究テーマの背景と目的
- 第2章 朱雀地区在住する又は通学する若者の現状
- 第3章 イベントの仕掛けとしての有効性
- 第4章 結論

第1章 研究テーマの背景と目的

我が国では、他国に比べ若者の地域への関心が低いことが問題になっている（内閣府、2013）。若者の地域活動への参加も減少傾向にあり、地域の大人が児童期の子どもばかりに期待の目を向け、思春期以降の若者を見失っていること（田中・萩原、2012）が要因の一つであると考えられる。

しかし、若者が地域に関心を持つことは、地域の担い手を育成する・大人と子供をつなげる・新しい地域活動を展開するなど、地域へのメリットになる。また、若者にとっても、若者の地域での居場所が明確になる、「仕事」に対する展望が広がるなどのメリットがある。

よって、若者の地域への関心を高めるための仕掛けを明らかにすることは、社会にとって重要であると考え（本研究では、若者の地域関心を惹くための活動を仕掛けと定義する）。

本研究では、その仕掛けのひとつである「居場所」に着目し、それを実現する方法を明らかにすることを目的とする（本研究では若者を「中・高・大学生」、居場所を「人と人が関わる場所」と定義する）。

居場所を作る際には、「公共空間」を利用することが有効であると考えられる。その理由として、街やコミュニティに活き活きとした公共空間があると、居住者に強いコミュニティ意識を持つことに繋がる（園田、2015）からだ。このように公共空間では地域活動を促すような活動が生まれ、交流の場となりつつあり、最終的には、「居場所」としての活用が可能であると考えられる。また、公共空間のうち、特にオープンスペース・公園は、誰もが気軽に活動に参加でき、時間や空間の制限をほとんど受けることがないため、居場所を作る際により有効的だと考えられる。

そのオープンスペース・公園である有馬富士公園では、キャストも公園を利用する人＝ゲストにやってもらう取り組みを行い、来園者数を増加させ（山崎、2011）、また、公園運営に関わる人が増えることにより、地域住民の中で新たなコミュニティが誕生させた。また、神戸市にある栄公園でも、他の利用者と顔を合わせる機会を公園でつくることにより、問題を解決し新しいコミュニティの形成につなげた。（田中・福田、2011）

このようにオープンスペース・公園を活用した事例では、住民が主体となった地域住民

参加型のイベントを開催し、人と人との交流をつくり、最終的にはコミュニティを形成し、つまりは「居場所」づくりに近いものを作り出した。よって、居場所をつくる際にはオープンスペース・公園を活用することがより有効的だと考えられる。

しかし、オープンスペース・公園が多く見られるニュータウンは、地縁・血縁が少なく、社会から孤立しやすい層が多く、若者の「居場所」がより一層ないという課題が存在する。その理由として、郊外は共同性が生まれにくく、コミュニティの形成がしにくい環境であること（三浦、2004）、次に郊外の住人は、都市での生活を経験した人々が多く、コミュニケーションを不必要だと感じる（若林幹夫、2007）、最後に、郊外の若者は、他の近隣住民から干渉されず育ったため、コミュニティ形成の仕方が分からず、居場所の形成が困難になること（三浦展、1999）、が挙げられる。以上のことから、郊外における公共空間とコミュニティ（若者を含む）を結び付けることが課題であり、そのためには意図的な仕組みの導入が必要であると考えられる。

そこで本研究では、公共空間（オープンスペース・公園）が多く存在しているが、若者の地域関心が比較的低いと考えられるニュータウンに着目し、平城ニュータウンが併設している良県奈良市朱雀地区を対象とし、若者が地域に関心を持つための仕掛けを明らかにする。

第2章 朱雀地区在住する又は通学する若者の現状

2-1 地区の概況

本研究の調査対象である朱雀地区とは、奈良県奈良市北西部に位置し、関西学術研究都市および奈良市のニュータウンとしての機能をもつ地域であり、小学校を核とする住宅地のまとまりを市街地形成の基本的単位として、各種企業の研究施設、学校園や商業施設が設けられている。

地区内には奈良県立平城高等学校（全校生徒1,200人）がある。また、朱雀地区の総人口は6,676人、世帯数は2,791であり、若者の内訳は、朱雀地区全体で10～14歳が285人、15～19歳が324人、20～24歳が339人合計948人となっている（奈良市の町名別・年齢（5歳階級）別人口及び世帯数、H30.12）。このように朱雀地区には一定数、若者が存在するが、朱雀自治連合会や平城東公民館へのインタビュー調査からは、地域活動や社会教育の若者に対する取り組みはほとんど行われておらず、また、若者だけの組織的な活動は行われていないが、平城高校との連携（地区の清掃活動や夏祭りへの参加）を通じて高校生と地域の交流はあると判明した。



図1 朱雀地区地図

2-2 朱雀地区に在住する若者の地域に対する意識

朱雀地区において朱雀地区在住若者が最も集まるイベントである、2018年8月4日（土）開催の朱雀地区夏まつりで、若者だと思われる計45名に声をかけアンケート調査を行なった。

(1) 地区に在住する若者の関心・地域における居心地のいい場所

調査結果からは、回答者の約半数が「自宅のある地域」に関心を持っていることが分かった（51%）。内訳を見ると、その半数以上が、地域に関心を持つ理由として「知り合い・友人がいる」と回答している（58%）。この結果から、地域に関心を持つには、住民同士のつながりの創出が大きな要素になっている。

居心地のいい場所についての調査では、公共空間の中でも公共施設や運動施設の選択率は低いですが、同じく公共空間である公園や広場などは、選択率が比較的高い（図2、学校別地域における居心地のいい場所はどこか（夏祭り参加者）（複数回答））。この結果から、オープンスペース・公園は活用が仕掛けを活用する場として有効であると考えられる。

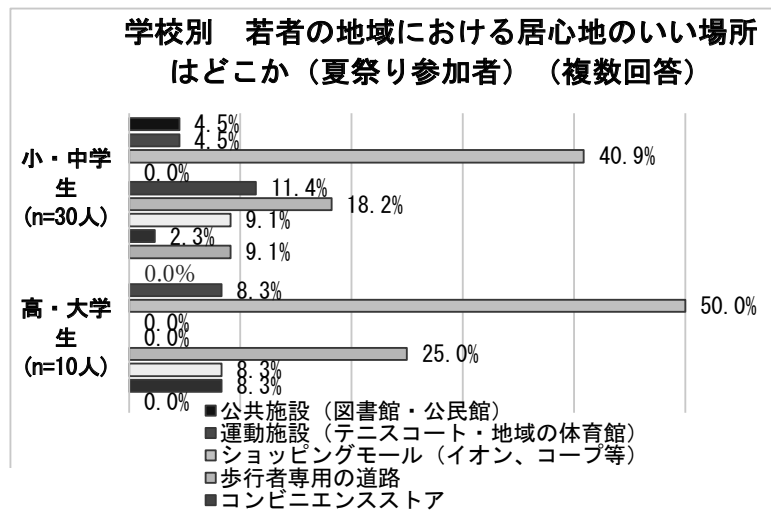


図2

(2) 地区に在住する若者の平城第二号公園の利用状況・目的

公共空間の中でも、朱雀地区の代表的な公園である平城第二号公園の利用頻度を見ると、「何度か来たことはある」（44%）、「ほとんど来たことはない」（38%）が選択率の約8割を占めていた。利用目的の内訳を見ると「イベント参加」が最も多く、約半数を占めており、日常的な利用は全体の1割程度となっている。癒しを求めている利用や日常的な利用が少ないことから、若者は公園を、非日常を楽しむ場として使用していることが分かった（図3、若者の平城第二号公園の利用目的（夏祭り参加者）（複数回答））。

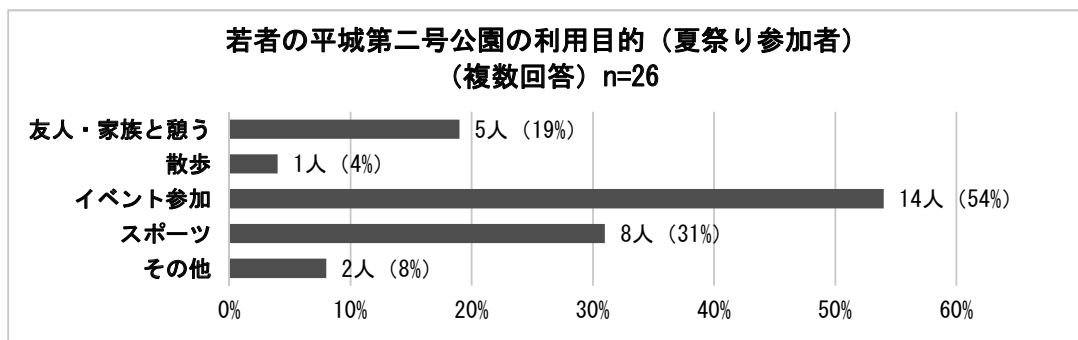


図3

(3) 地区に在住する夏祭り参加のきっかけ

また、夏祭りに参加した若者について、夏祭り参加のきっかけをみると、小・中学生は友達に誘われての参加が多く、高・大学生は地元を離れ新しい人間関係になってしまうことからあまり地域のイベントには参加しないが、友達に誘われた時は参加することがわかる。そのため若者には、友人と一緒に参加できるイベントが効果的である。

(4) 地区に在住する若者の地域への関心

若者に対する地域活動や社会教育はほとんど見られず、また、若者だけの組織的な活動はほとんど行われていないことが判明している。

しかし、夏祭りに参加した若者の地域に対する関心を見ると、地域に関心を持つ若者は多かった（84％）。また、夏祭りに来ていた小・中学生のうち80％の人が平城ニュータウン内に住んでおり、小・中学生のうち自宅のある地域・学校のある地域に関心のある人は87.5％と多かった。このことから、朱雀地区に住む若者の多くは朱雀地区に関心があった。

そのため公共空間であるオープンスペース・公園を利用した、友人とともに参加できるイベント企画が必要であり、仕掛けを活用する場として有効であると考えられる。

2-3 朱雀地区に通学する若者の地域に対する意識

(1) 地区に通学する若者の地域に対する関心

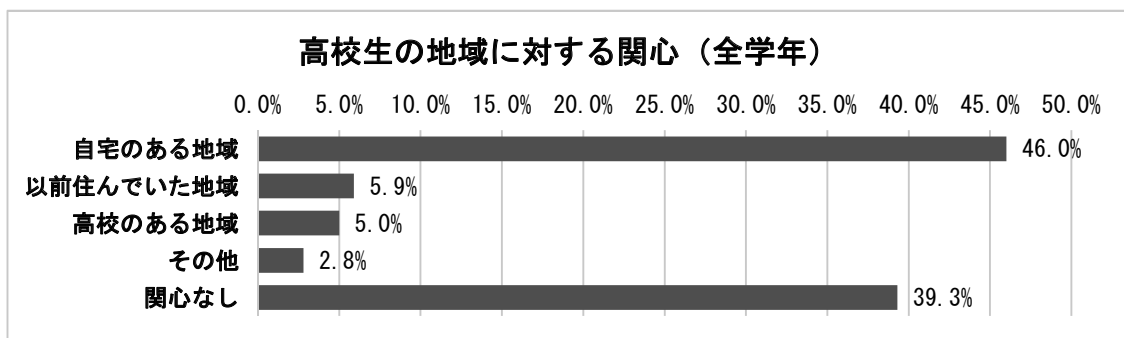


図4

(2) 地区に通学する若者の地域における居心地の良い場所

図5から分かるように、「地域において居心地の良い場所」はどこかという質問に対し、全体の約5割が「ショッピングモール」、約3割が「公園や広場など緑が多い場所」と答えた。また、低学年より高学年の方が「ショッピングモール」と答えた割合は低く、「公園や広場など緑が多い場所」と答えた割合は高かった。

(3) 地区に通学する若者の平城第2号公園の利用状況

平城第2号公園に「行ったことがある」と答えたのは全体の約4割であり、低学年より高学年の方が公園の利用頻度が多い。また、利用目的は図6から分かるように、平城第二号公園に行ったことがあると回答した人の約5割が「部活の練習や試合」と答えた。そして、高学年の方が団体利用よりも個人活動の利用が多い。

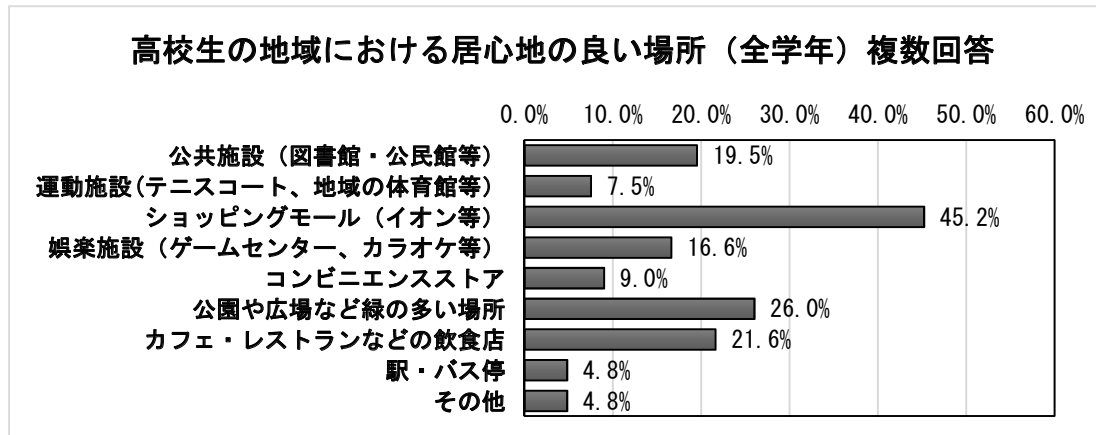


図5

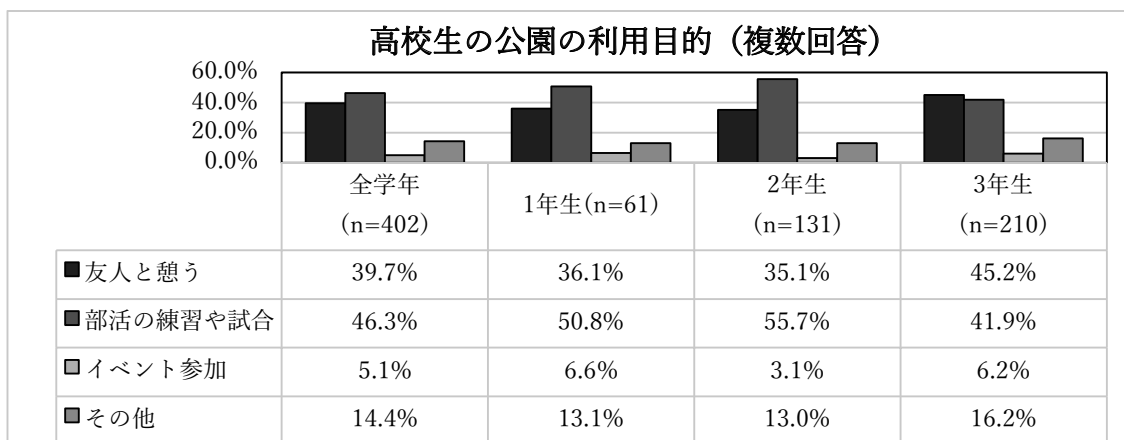


図6

(4) まとめ

以上より、若者は地域活動に関心があるものの活動の参加にはつながっておらず、地域参加を促すには、学校などの教育機関と地域との連携が重要であることが考えられる。また、若者が地域に関心を持つには地域に愛着を持つ必要があり、そのためにはその地域で多くの時間を過ごし、地域を知るためのプロセスが重要であると考えられる。

さらに、オープンスペース・公共空間の居場所化については、最初は個人利用でなくても、その場に行き活動をすることで、日常的な個人利用、つまりは「居場所」化につながると考えられる。

3章 イベントの仕掛けとしての有効性

朱雀地区の若者の地域への関心や愛着を調べるために地域に関心を持つきっかけづくりを目的とした謎解きまち歩き「変わりゆく街に秘めた謎in朱雀」（奈良県立大学佐藤ゼミ主催・朱雀地区自治連合会協力）を朱雀地区にて2018年11月24日に開催し、イベント参加者144名のうちゴールした人を対象にアンケート調査を実施した。（110票回収、有効回収109票）

(1) 若者の地域イベントの参加きっかけ

本イベントへの参加きっかけとして、「学校で聞いて」と答えたのは小学生、高校生・大学生ともに約5割で半数を超えている（表1）。よって、学生の地域参加を促すためには学校によっての周知が非常に有効であると考えられる。また、同行者について、高校生・大学生は「学校の友人」が約8割を超えており（表1）、若者は友人同士であれば地域のイベントに参加しやすい傾向にあると考えられる。

表1 本イベントへの参加きっかけ

参加きっかけ（複数回答）	小学生	高校生・大学生	社会人・その他
自治会広報・回覧板・掲示板	28.9%	2.2%	59.5%
家族から聞いて	10.5%	6.7%	8.1%
学校で聞いて	50.0%	53.3%	24.3%
友人に誘われて	10.5%	24.4%	0.0%
たまたま（飛び入り）	0.0%	8.9%	0.0%
Twitter	0.0%	2.2%	0.0%
Instagram	0.0%	0.0%	0.0%
その他	0.0%	2.2%	8.1%
無回答	0.0%	0.0%	0.0%

(2) 本イベントの効果

イベントの良かった点については、「まちを歩くことが楽しかった」が約2割、「地域を知るきっかけになった」が約1.5割であった（表2）。このように、地域を知るきっかけとなった点を良いも一定数いた。また、「地域を知るきっかけになった」と答えた（16.3%）のうち、朱雀地区（朱雀小学校区）在住者（36.4%）で約4割を占める（表2）ことから、内容の面白いイベントや地域を知ることでできるイベントは有効であると考えられる。

表2 本イベントの良かった点

イベントの良かった点	小学生	高校生・大学生	社会人・その他
地域を知るきっかけになった	12.5%	19.2%	16.0%
他の参加者との交流ができた	6.3%	5.1%	10.7%
スタッフとの交流ができた	6.3%	14.1%	9.3%
まちを歩くことが楽しかった	16.7%	26.9%	25.3%
謎を解くことが楽しかった	52.1%	32.1%	34.7%
その他	6.3%	2.6%	4.0%

(3) 若者の地域イベントへの参加意向

再来したい場所について、所属別にみると、「平城第二号公園」がどの年代も最も多かった。また、「パン屋さん（パンブロー）」はどの年代も2番目に多かった。以上のことから、くつろげる場があること、食に関する場であることがもう一度来てみたいと思う場所にな

る要因であると考えられる。このように、もう一度来たいと思わせることができれば、地域に出てくる人も増え、地域づくりのきっかけになると考えられる。

また、今後の参加者側としての参加意向は、「とても思う」「やや思う」を合わせて、どの年代もほぼ10割で、今後の企画者側としての参加意向は「とても思う」「やや思う」を合わせて、所属別にみると、どれも半数以上を占めており、高校生・大学生は7割を超えている（表3）。以上から、本イベントは若者の地域参加を促すことに有効であったと考えられる。

表3 今後の企画者側としての参加意向

企画として参加したいか	小学生	高校生・大学生	社会人・その他
とても思う	26.7%	31.0%	16.7%
やや思う	30.0%	45.2%	38.9%
あまり思わない	26.7%	14.3%	27.8%
思わない	10.0%	7.1%	11.1%
すでに関わった	0.0%	0.0%	0.0%
無回答	6.7%	2.4%	5.6%

4章 結論

以上の調査から、若者が地域に関心を高めるための仕掛けとして3つのことが考えられる。

まず、仕掛けとして、若者に地域活動を促す情報発信が有効であると考えられる。朱雀地区内に住む、または、通う若者を対象にしたアンケート調査からは、地域活動に参加したきっかけとして、学校や地域による広報という回答が多くみられた。よって、信頼できる機関から若者に地域活動を促す情報発信をすることがより有効であると考えられる。

次に、仕掛けとして、若者が参加できるイベントを実施することが有効であると考えられる。また、イベント実施する際、①友人と一緒に参加できる、②イベントの内容が若者にとって興味関心が高い、③地域を知ることができる、という3点を備えていることが、若者が参加しやすく、地域に関心を持つことができるイベントとしてより有効的だと考えられる。

最後に、仮説として若者の地域への関心を高めるための仕掛けとして着目していた、居場所をつくることが有効であると考えられる。

加えて、居場所を作る際には、オープンスペース・公園の公共空間を活用することがより有効的であると考えられる。朱雀地区内に住む、また、通う若者を対象としたアンケート調査では、居心地の良い場所として、ショッピングモールや公園や広場などの多機能・多目的という特徴を持つ場所という回答が多く挙がっていた。また、オープンスペース・公園は、時間を問わず使用できる、ショッピングモールより使用制限がないことから住民参加型の活動がしやすいと考えられ、また、地域住民の交流が生まれやすいことから、地域住民の居場所形成の場所としてより有効的であると考えられる。

また、仕掛けの実現方法として、まずは、若者が興味を持つ面白いイベントを開催、次に、参加者の中から、企画者になってくれる若者を募る、最後に、次の地域イベントを企

画・運営してもらおうことが考えられる。このように、企画者として関わることで、地域が若者の居場所になり、最終的には、地域に関心を持つきっかけになると考えられる。

現時点では、我々は、イベントを開催し、企画者になりうる若者を見つけるところまで到達することができた。

今後の朱雀地区では、若者が沢山集まると考えられる”朱雀夏祭り”で、若者の興味がありそうなイベントを開催し、地域活動をする仲間を募り、そこで集まった若者に主体的に地域活動をしてもらうという方法が有効なのではないかと考えられる。

以上を結論とする。

【参考文献】

- ・ 内閣府「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf_index.html
- ・ 羽田野慶子「若者と地域活動―福井市における大学生のまちづくり活動の事例から―」
http://jww.iss.u-tokyo.ac.jp/jss/pdf/jss6501_097116.pdf
- ・ 内閣府「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b2_2.pdf
- ・ 田中治彦・萩原健次郎編著「若者の居場所と参加 ユースワークが築く新たな社会」
発行年：2012年 出版社名：東洋館出版社
- ・ 株式会社シマネプロモーション「市内出身中・高校生の地域や将来意識に関するアンケート調査結果報告書」
<http://www.city.hamada.shimane.jp/www/contents/1439948338553/files/anketo.pdf>
- ・ 園田聡（2015）「日本の公共的空間の整備・活用におけるプレイスメイキングの展開に関する研究」〈www.lib.kogakuin.ac.jp〉
- ・ 山崎亮（2011）「コミュニティデザイン人がつながるしくみをつくる」学芸出版社
- ・ 田代順孝・中瀬勲・林まゆみ・金子忠一・菅博嗣編（2011）「パークマネジメント―地域で活かされる公園づくり」, p141-148（田中充・福田英明）
- ・ 三浦展（2004）『ファスト風土化する日本』洋泉社
- ・ 若林幹夫（2007）『郊外の社会学』筑摩書房
- ・ 三浦展（2006）『脱ファスト風土宣言―商店街を救え！』洋泉社
- ・ 三浦展（1999）『「家族」と「幸福」の戦後史』講談社
- ・ 『朱雀地区自治連合会30周年記念誌 私たちの朱雀』（発行：2015.12）
- ・ 『平城NTのあゆみ（朱雀地区）』（発行：1997.3）
- ・ 『まちづくり三十年』（発行：1985.12）
- ・ 奈良市「H30奈良市の町名別世帯数及び人口」〈<http://www.city.nara.lg.jp/www/contents/1255659338323/index.html>〉（参照2019-1-5）
- ・ 「公共財団法人 奈良市生涯学習財団」〈https://manabunara.jp/soshiki_view.php?so_cd1=23&so_cd2=0&so_cd3=0&so_cd4=0&so_cd5=0&bn_cd=12〉